ショコラの罠と蜜の誘惑

桜舘ゆう
YU SAKURADATE

ノーチェ文庫

クエスト
レオハルトが最も信頼する従者。
ミルゲル
トルネア王国の王配殿下。ターラディアへ来たのには、理由があるようで……？
ジェラル
グラフォート侯爵家の子息。何故かレオハルトとグレヴィアの仲を気にしている。
シスター・アリエッタ
ユリアナの親友。物腰が柔らかく、気品に満ち溢れている。
グレヴィア
アルベティーニ公爵家令嬢。レオハルトの花嫁候補のひとり。趣味はお菓子作り。
ユリアナ
レオーネ子爵家の一人娘。レオハルトに淡い想いを寄せ、グレヴィアを姉のように慕っている。引っ込み思案だが優しい心の持ち主。
レオハルト
ターラディア王国の王太子。自分にも他人にも厳しい美青年。ユリアナを妹のように可愛がる一方、強く執着している。
登場人物紹介

目次

ショコラの罠と蜜の誘惑　7
書き下ろし番外編
蜜より甘い彼女の誘惑　361

ショコラの罠と蜜の誘惑

石造りの教会の窓から太陽の光が差し込み、祈りを捧げる少女を照らしていた。
少女は、ターラディア王国の子爵令嬢、ユリアナ・レオーネ。
暖かな日差しを浴びて輝く彼女のストロベリーレッドの巻き髪には、白い花やレースのリボンが飾られ、十八歳のうら若い乙女の愛らしさを引き立てている。
ユリアナは恭しく木の床に跪き、ラーグ神の石像の前で熱心に祈り続けていた。
穏やかで優しい世界が、ずっと続きますように。
皆が健やかに過ごせますように――と。

王宮の近くにあるこの小さな教会で、ラーグ神に祈りを捧げることは、ユリアナの日課だった。
ターラディア王国は王室を始めとして、国全体がラーグ神を唯一の神として奉ずる

ラーグ教を信仰している。
両性具有のラーグ神は、ときに男性、またあるときには女性の姿で現れる。そして人の世に降臨し、人間と結ばれ子を儲け、世界を繁栄に導いたと伝えられている。
子は財を成し、国を興隆に導く。そんなラーグ教の教えが根強いターラディアでは、子は多ければ多いほどよいとされる。王族に至っては、婚姻から一ヶ月公務を休み、その間は子作りに励まなければならないほどだ。
ユリアナは髪に結ばれたレースのリボンを揺らしながら顔を上げると、自身の家のことを思い、そっと溜息をついた。
子は財を成す。けれど、レオーネ家の子はユリアナひとり――
「あまり熱っぽく見つめていると、ラーグ神が心を動かされ、ご降臨されますよ」
ふいに、からかうような声が小さな教会に響いた。
ユリアナが声のした方向を見ると、修道服を着た、年若い女性が立っていた。彼女はこの教会のシスターで、名前はアリエッタという。
アリエッタは三年前に亡くなったシスターの後任として、この教会にやってきた。
黒い修道服に同色のベールを被った彼女は、華やかな色のドレスやきらびやかな飾りをつけずとも十分に美しく、並々ならぬ気品を感じさせる。

ユリアナはアリエッタがどこの国で産まれて、どういういきさつでシスターになったか知らない。

しかし、彼女の身のこなしは、ユリアナの知る貴族の令嬢たちと変わらず上品だった。だからユリアナは、アリエッタはどこかの国の貴族だったのではないかと考えている。それは推測に過ぎないものの、ユリアナが彼女に親近感を抱くには十分な理由だった。そのため、アリエッタならわかってくれるかもしれないと、つい彼女には様々な相談をしてしまうのだ。

「ラーグ神が私などを見初めてくださるとは思えません」

ユリアナがそう返事をすると、アリエッタは口元に手を添えて優雅に微笑んだ。

「それはどうでしょう？　ユリアナのような可愛らしい娘に、こうも日々熱心に祈られては、ラーグ神も心を動かされるように思いますけど。特に、今日のドレスはいつもとは違う雰囲気ですし」

「こ、このドレスはお姉様にいただいたもので……ラーグ神に対して、どうというものでは……」

白磁のような頬をうっすら赤らめて反論するユリアナを見て、アリエッタはおかしそうに笑った。

ユリアナが告げたお姉様というのは、彼女の実の姉の話ではない。

お姉様――アルベティーニ公爵家の長女グレヴィア。彼女はユリアナの幼なじみで、ユリアナが赤子の頃からの付き合いだ。

そんな彼女がつい先日ユリアナに贈った淡いエメラルドグリーンのドレスは、スクエアネックの豪奢なデザインだった。

スカートは幾重にも重ねられたオーガンジーでできた愛らしい作り。しかし、胸元はサイズを間違えたのではないのかと思うほど大きく開いている。大切なお姉様からの贈り物ではあるが、こういったドレスは、自分にはまだ早いのではないかとユリアナは気にしていた。

それ故に、アリエッタに『いつもと違う』と言われ、羞恥に耳まで熱くなってしまう。

「清純なユリアナにしては、デザインが少し大胆だとは思いましたが、似合っていますよ？　大人っぽくて美しいわ」

賛辞にますます頬を赤く染めるユリアナを、アリエッタは微笑ましそうに見ている。

「とにかく、お座りになって」

アリエッタは、ユリアナを促した。

ユリアナはオーガンジーの裾をひるがえし、勧められるまま腰を下ろす。

ここは小さな教会だが、三人掛けの木製の椅子が左右に八脚ずつ備え付けられており、内部はそれなりに広い。

アリエッタひとりでこの教会を管理しているため、以前「大変ではないか？」と聞いたことがある。しかし彼女は「ひとりのほうがいいのよ」と笑っていた。

「今日もこのあとはお茶会に行くのかしら？」

「は、はい……」

アリエッタからの問いかけに、ユリアナは少し俯いてしまう。

お茶会というのは、王宮庭園内にある石造りの小宮殿の一室で、ほぼ毎日行われているものだ。

ターラディア王国は、一年を通して春のように温暖かつ穏やかな気候で、常に美しい花が咲く国である。王宮庭園はそんな花々に彩られており、ユリアナたちがお茶会をする小宮殿もまた、緑と花に囲まれていた。

手入れの行き届いた花々の中で、美味しいお茶とお菓子を楽しむ贅沢な日々。しかし、ユリアナは最近、ほんの少しだけ憂いを覚えていた。

何故ならお茶会の参加者は、この国の王子レオハルト・グランシャールと、彼の親戚にあたるグレヴィア、そしてユリアナの三人だけ。

彼らはユリアナに対して本当の妹のように接してくれている。だからといって、自分も同じように思ってしまってもいいのだろうか。それを考えると、ユリアナはいつも心苦しくなった。

レオハルトはこの国唯一の王子であり、グレヴィアも公爵家の令嬢。一方でユリアナは、貴族とはいっても子爵家の娘である。

グレヴィアの場合、レオハルトの従兄妹かつ花嫁候補であるから王宮への出入りが許されているが、自分はどうだろう？　ユリアナはそこまで考えて溜息をつく。

（駄目……なのよね。本当は）

なにも考えずに、無邪気に彼らと遊んでいた昔とは違う。ユリアナ自身は、今でも彼らを兄と姉のように敬愛している。けれど、レオハルトと親しくすることについて、周りの貴族はそれを許さない空気を醸し出していた。

（ううん……周りの人たちばかりではないわ）

レオハルトも、貴族たちと同様に考えているのではないか。

いつからか、レオハルトはユリアナといるときに、妙に思い詰めた顔をするようになった。なにかきっかけとなった出来事があった気がするのだが、それがなんであったかは思い出せない。

思い出そうとしても、ガーベラに似た真っ白な花の姿だけが脳裏に浮かぶのだ。
自分のせいでレオハルトが思い悩んでいるのなら、再び同じことをしてしまわないように、きっかけを思い出さなければいけないのに――
（お兄様とお姉様……早くご結婚されればいいのに）
レオハルトとグレヴィアは、今年でそれぞれ二十四歳と二十三歳。年齢的にも、そろそろふたりが結婚するのではないかと噂されている。ユリアナも、ふたりはとてもお似合いのカップルであり、次の王妃にはグレヴィアが相応しいと考えていた。
美しくて優しいグレヴィア。そして美貌の王子と呼ばれる怜悧なレオハルト。
ユリアナは、ふたりが自分とは違う世界にいるように感じていた。
だからこそ、ユリアナはふたりに結婚してほしかった。優しいグレヴィアなら、レオハルトのいる世界から、ユリアナを追い出したりはしないだろう。
「……私、このままでいいのかなって思っているんです。シスター・アリエッタ」
「それはどういった理由で？」
「レオハルト様もグレヴィア様も、ご兄妹がいらっしゃらないこともあってか、私を可愛がってくださいます。けれど、いつまでもそれに甘えてはいけない気がして……」
ユリアナがぽつぽつと話すのを、アリエッタは静かに聞いている。

「なかなか子ができなかったレオーネ家をずっと案じていたおふたりのご両親が、私の誕生を喜んで、おふたりと交友を結ばせてくださったことは、とても嬉しいのです……でも」
「ユリアナはレオハルト王子をどのように思っているの？」
「尊敬すべきお兄様だと思っています」
「そう」
アリエッタが何故そんなことを聞いてきたのか、ユリアナにはわからなかったが、そのまま話を続けた。
「物心がついたときから、おふたりが傍にいてくださったので、私はそれを当たり前のように思っていましたが、本当はいけないことなのだと……最近は、そう思い始めていて」
「……ユリアナはどうしたいの？」
「私は……」
このままではいけないとわかっていながら、このままでいたいと望んでしまう。
ユリアナはアリエッタの問いに答えられず、そっと顔を上げてラーグ神の像を見つめた。
神に望みたいのは、この穏やかで優しい世界が続いていくこと。その望みの奥底にあ

る自分の本音に気付いた途端、彼女の銀灰色の瞳が涙で滲む。
ユリアナの潤んだ瞳を見たアリエッタは、彼女の前に跪き、そっと手を握った。
「ずっとなんて望めないと、わかっているんです。でも、完全に世界が分かれてしまうのはいや……」
ユリアナの口から漏れ出た言葉に、アリエッタは優しい笑みを浮かべる。
今まで誰にも言えなかった心中を吐き出すと、ユリアナの瞳からは次から次へと涙が溢れた。
もし同じことをレオハルトに言えば、彼はユリアナと距離を作ってしまうかもしれない。グレヴィアに言えば、逆にどんな無理をしてでも距離を詰めようとするだろう。また、このふたり以外に言っても理解はされないと思っていたから、誰にも言えずにいた。
アリエッタは琥珀色の瞳をユリアナに向けたまま黙っている。が、それでよかった。
アドバイスをもらっても、ユリアナが実行できない以上、現状は動かないのだから。
聖女さながらの美しく優しい瞳で見つめられれば、何故だかそれだけで、心が浄化されていくように感じる。
ユリアナは頬を伝う涙を指で拭って、椅子に座り直すアリエッタに微笑んだ。
「アリエッタは不思議な人ね。話を聞いてもらうだけで心が軽くなるの」

「ありがとう。そう言ってくれるのはユリアナだけよ……三年前から、ずっと感謝している。知らない土地に来て……正直心細いと思っていたの。あなたがこうして毎日来てくれることで、何度も救われたわ」
「え？」
ユリアナは驚いてアリエッタへ視線を向ける。すると、彼女はにっこりと笑った。
「秘密の話よ。人々を導くべきシスターが心細いと思っているなんて、他の人が聞いたらなんて言うかわからないわ」
神に仕えるシスターでも、寂しさを感じることもある。
ユリアナには理解できるが、そう思わない人間がいるのも事実だ。
「もちろん、誰にも言わないわ。アリエッタ」
「大好きよ、ユリアナ。地位のないシスターに言われても、ただ困るだけかもしれないけれど」
「そんなことないわ。私だって、アリエッタが大好きよ」
「爵位がなくても？」
ユリアナは大きく頷いた。
「私の大事な友人ですもの。爵位なんて関係ないわ」

その言葉に、アリエッタは嬉しそうに目を細める。
「……きっと、ユリアナの大事な人だって、そう思っているわよ」
「私の大事な人？」
大事な人と言われて浮かぶ人物は、たったひとりだ。
ふたりでないのは何故なのか。ユリアナは不思議に感じると同時に、その人物を思って心に痛みを感じた。
切なくて甘い、心の痛み。この痛みの正体は、なんなのだろう。
ユリアナがそんなことを考えていると、やがて、ギギギ……と教会の木の扉が開かれる重い音がした。ユリアナとアリエッタのふたりは、音のほうを振り向く。
「――お兄様」
そこには、今、ユリアナが思い浮かべていた人物――黒の詰襟の礼装に身を包んだレオハルトがいた。
戸口に立つ彼の銀色の髪が、日差しを浴びてキラキラと輝く様はとても美しく、ユリアナは一瞬呼吸さえ忘れて見入った。
肩章から胸元に下がる金糸の飾緒を揺らしながら、レオハルトはカツカツと彼女たちのいる場所まで歩み寄る。

「あまりにも遅いから迎えに来た」
「ご、ごめんなさいお兄様、おふたりをお待たせしてしまったんですね」
「心配しただけだよ、ユリアナ」
目の前に差し伸べられた彼の手。ユリアナは、条件反射のように自分の手を載せて立ち上がった。
レオハルトは前髪をさらりと揺らしながら、艶(つや)め き輝くエメラルドグリーンの瞳を、アリエッタへと向ける。
「すまない、話の途中だったのだろうか？」
「いいえ」
「いつもユリアナが世話になっている。感謝しているよシスター」
「とんでもないことでございます」
そう言ってアリエッタが微笑(ほほえ)むと、レオハルトはユリアナの手を引き、戸口に向かって歩き始める。
彼に連れられ歩きながら、ユリアナは小さく息を吐いた。
迷っているのに、いつまでもこんなことをしていていいのだろうか。
彼らと同じ世界には居続けたい。けれど、自分がいることで、レオハルトとグレヴィ

アの邪魔をしてしまっているのではないかと思える。
ふたりに結婚してほしいからこそ、ふたりきりの時間に割り込みたくない。
レオハルトが公務で忙しいのは、聞かなくてもわかる話だ。現に今も、彼は公務で着用する礼装(れいそう)のままユリアナを迎えに来ている。そんな彼の予定の合間を縫(ぬ)ってまで、お茶会を開き続ける意味はあるのだろうか。
（たぶん、私が、行かないと言えばいいだけ）
そうは思うものの、もしこのお茶会がなくなってしまったら、自分はいつ彼に会うことができるのだろう？
幼(おさな)い頃だって、王宮の門をくぐり抜けることはできても、レオハルトにはなかなか会わせてもらえなかった。年頃になった自分が彼に会わせてもらうことは、さらに難しいだろう。
王宮の大きな門の向こう側に広がる世界は、同じ国ではあるけれどもほとんど別世界。
王族が住むエディアノン宮殿には、千を超える数の部屋があり、その規模を見ただけでも、グランシャール家が代々受け継(つ)いできたものの重みがわかる。国家の繁栄のために子孫を残し、民(たみ)に豊かさと安定を約束すること。それが王族の務(つと)めである。
そして歴代の国王は、そのために政略結婚もしてきた。

教会のすぐ近くに停められていた王家所有の馬車に乗り込み、ユリアナは正面に座るレオハルトをちらりと見て俯く。

（お兄様のご両親は、政略結婚ではなかったけれど……）

レオハルトの母であった人――今は亡き王妃は身体が弱く、なかなか子に恵まれなかった。それ故、王妃に子ができないなら、第二王妃をという声が上がった。しかし国王は聞き入れず、そのせいでレオハルトが産まれるまでのいっとき、貴族たちからの王室への風当たりが強くなってしまった。国王はそれほど王妃を愛していたのかと、ユリアナは両親からその話を聞かされたときに感じたものだった。しかし結局のところ、両親がそんな話をわざわざ聞かせたのは――

そこまで考えると、ユリアナの胸がずきんと痛む。

代々子供のできにくいレオーネ家は、結婚相手として歓迎される家柄ではないと、あのときの両親はユリアナに暗に教えていたのだ。

馬車は、お茶会の会場である王宮庭園内の小宮殿へと向かっていた。窓から外を眺めると、馬車はすでに庭園内に入っていて、いつものように可愛らしい花々が咲き乱れているのが見える。

今はまだ日常的にこうした景色を見ているが、いつかそうではなくなる日が来るだろう。そんな予感がして、ユリアナはほんの少し身体を震わせる。

「寒いのか？」

レオハルトの心配そうな声に、ユリアナは首を横に振る。

「あ……いいえ、大丈夫です」

「なら、いいのだけれど。今日はなんだか元気もないようだし、具合が悪いのではないかと心配しているよ？」

「ごめんなさい、お兄様。本当に大丈夫です」

「そうか」

エメラルドのように美しいレオハルトの目が細められた。

そんな彼と見つめ合っていると、胸が締めつけられ、息ができなくなる。

柔らかそうな白い肌や、銀色に輝く髪。見る者全てを魅了する美貌の持ち主である彼を、間近に見られなくなる日がやってくるのではと想像するだけで、震え上がるような思いがする。

それでも、時間の流れは止められない。いつかその日がやってきてしまうのだろう。

そう考えながらユリアナは俯き、オーガンジーのスカートをぎゅっと握り締めた。

「今日のドレス、可愛らしいね」

レオハルトの言葉に、ユリアナは驚いて顔を上げる。
「あ、ありがとうございます。このドレスは、お姉様からの贈り物なんです」
「グレヴィアから？　そう……。なんだか白い肌がよりいっそう……綺麗に見えるね」
そう言われると、いつもより大きく開いている胸元をレオハルトに見られたのかもしれない、とつい気になってしまう。ユリアナは羞恥に耳朶まで熱くなりながら、扇を開いて、胸元を隠す。
そんな彼女を見て、レオハルトはふっと笑う。
「近いうちに、そのドレスに合う首飾りをレオーネ邸に届けさせるよ。少しだけ首のあたりが寂しいからね」
「え？　あ、はい。ありがとうございます。お兄様……」
「それとも、その可愛らしい耳に飾るもののほうがいい？」
ふいに、正面の席に座っていたレオハルトの身体がユリアナに近付き、彼の指先が彼女の赤く染まっている耳朶に触れる。
「ひぁっ」
くすぐったさに思わず妙な声を出してしまい、ユリアナは慌てて口元を覆った。
「あぁ、ごめん。ユリアナはくすぐったがりなんだな」

レオハルトはそう言って笑うと、身体をもとの位置に戻す。
「ごめんなさい……」
「おまえが謝ることはないよ」
指先で僅かに触れられただけなのに、耳が熱い。いや、熱くなっているのはその部分だけではないが、それ以上は考えないことにする。
「その……ど、どちらでも、いいです」
自分の身体の変化をごまかすように、ユリアナは先程のレオハルトの質問に答えた。
「ん……では、せっかくだから揃いのものを贈るよ。グレヴィアに出し抜かれてばかりでは気に入らないからね」
「ありがとうございます。お兄様」
「楽しみにしていて」
そんな話をしているうちに、王宮庭園内の小宮殿に馬車が着いた。
「ユリアナ！　待っていたわ」
小宮殿の扉を開けてユリアナが中へ入ると、テーブルいっぱいにお菓子を並べていたグレヴィアが濃紺のドレスの裾をひるがえし、彼女に駆け寄ってきた。

「ごめんなさい、遅くなってしまって」
「いいのよ、少し心配しただけ」
先程、迎えに来てくれたレオハルトも、同じことをユリアナに告げていた。
いつもより少し、祈りとアリエッタとのお喋りの時間が長かっただけだが、ふたりに心配させてしまったことを、ユリアナは申し訳なく思いつつ謝罪する。
「本当にごめんなさい。お兄様、お姉様。ついシスター・アリエッタと話し込んでしまって」
「ユリアナはシスター・アリエッタのことが好きよね」
グレヴィアは、艶めいた唇に笑みをたたえ、目を細めながらそう言った。
少しつり上がった知的な目は彼女の美しさの象徴であり、青い瞳はサファイアを思わせる。
エメラルドの瞳を持つレオハルトとサファイアの瞳を持つグレヴィアは、やはりお似合いだと、ユリアナはぼんやりと考えた。
「……はい、シスター・アリエッタはとても優しくしてくださいますから」
「だが、相手がたとえシスターであっても、おまえが心を許しているという事実には嫉妬するね」
椅子に座ったレオハルトは、長い足を組んでそんなことを言い始める。

「え？」
嫉妬される理由なんてないはずだと、ユリアナが戸惑っていると、グレヴィアが紅茶を用意しながら笑った。
「そうね、大事なユリアナが私たち以外の人に信頼を寄せているというのは、嫉妬してしまうわ」
それはまだ、自分が彼らに必要とされているということなのだろうか。
ユリアナと同じ年頃で、もっと爵位の高い貴族の娘は沢山いる。それなのに、ふたりは何故ユリアナを可愛がるのか。他の貴族たちからそう囁かれているのを、ユリアナは知っていた。
レオーネ子爵家は長い間子供に恵まれずにいた。養子をとろうかという話が出始めた矢先にやっと授かった子がユリアナだ。
もともと母親同士の交流があったグランシャール王家とアルベティーニ公爵家も、なかなか子に恵まれなかった。それ故に両家はユリアナの誕生を自分の家の出来事のように喜び、祝ってくれた。そして、レオハルトとグレヴィアもユリアナをとても気に入ってくれ、幼なじみの関係は今もずっと続いている。けれど、どんなに彼らが気さくに接してくれても、自分は所詮、子爵家の娘。甘えすぎてはいけない。

席に座ったものの、お菓子を少し食べただけでぼんやり考え込んでしまったユリアナに、グレヴィアが心配そうに声をかけた。
「……あら、ユリアナ。今日はあまり食がすすまないようね？　お口に合わなかった？」
テーブルにずらりと並んだ焼き菓子は、お菓子作りが好きなグレヴィアが作ってきたものだ。
「ユリアナには少し、ブランデーがきついのかもしれないな」
レーズンやナッツが入ったブランデーケーキを食べながら言うレオハルトに、ユリアナは慌てて首を横に振る。
「大丈夫です。どれもとても美味しいです」
「よかったわ。もう、レオハルトったら、ご自分の好みを言わないで」
グレヴィアが咎めるように言いながら綺麗な青い瞳を向けると、レオハルトは魅惑的に微笑んだ。
（……やっぱり、私がおふたりの時間を邪魔しているのだわ）
三人でのお茶会は、ユリアナが十五になった年にグレヴィアの発案で始まった。今年でかれこれ三年目になる。その間ずっと、自分がふたりの愛を育む時間を短くしていたのだとすれば、申し訳ない。

ユリアナは、唐突に立ち上がった。
「あ、あの、私、用事を思い出して……今日はこれで、失礼させていただきます」
「そうなの？　もう少し色々なお話をしたかったのに」
ユリアナの言葉に、グレヴィアは残念そうに返事をした。
「ごめんなさい、お姉様」
「では、私が屋敷まで送ろう」
そう言いながら立ち上がるレオハルトに驚き、ユリアナは首を左右に大きく振る。
「いいえ、お兄様、大丈夫です」
「遠慮することないわ。レオハルトに送ってもらいなさい」
「で、でも」
思わぬ展開に困ってしまう。
「また、明日ね。ユリアナ」
有無を言わさぬグレヴィアの笑顔に、ユリアナはそれ以上の言葉が出てこなかった。
彼女たちをふたりきりにさせたくて帰ろうとしているのに、レオハルトに送られるのでは意味がない。しかし、こうなってしまっては従うしかなかった。

再びユリアナを乗せたレオハルトの馬車が、王宮庭園内を走る。
馬車が庭園の南西にさしかかったとき、ユリアナは花壇に咲く赤い薔薇を眺めて小さく息を吐いた。そんな彼女に、レオハルトは首を傾げて問いかける。
「どうかしたのか？」
「え？」
「溜息をついたように見えたよ」
「ごめんなさい……なんでもないです」
南西の花壇は、青々としたつげの垣根に囲われた内側に、赤い薔薇が植えられている。
垣根は迷路のような、ちょっとした散歩道になっていて、昔、ファルワナ公爵家令嬢のリズティーヌとレオハルトがそこを歩いていた――
七年前、幼いユリアナがレオハルトを訪ねて王宮に来た日、彼は花嫁候補のひとりであるリズティーヌと顔合わせをしている最中だった。
赤い薔薇を手折り、リズティーヌの髪に飾っていたレオハルト。
彼女の艶やかな黒髪に差し込まれた薔薇と、リズティーヌの手の甲に恭しく口付けるレオハルトの姿を見たとき、ユリアナは泣き出したい気持ちになった。
そんな過去を思い出してしまうから、ユリアナは南西の花壇が少し苦手だった。

「……ユリアナ？」
案じるようなレオハルトの声に、ユリアナは顔を上げる。
「お兄様、私……イヤリングやネックレスよりも……お花が欲しいです」
「花って、どんな花だろう？」
「赤い薔薇がいいです」
言っている間にも涙が溢れそうになって、ユリアナは慌てて無理に微笑んだ。
「赤い薔薇？　いいよ、おまえが望むなら、レオーネ邸に届けさせよう」
「……はい」
ユリアナは微笑みを浮かべたまま、ゆっくり頷く。
本当に欲しいものの正体を、打ち消してしまうように。

＊　＊　＊

「今日は、レオハルトは来られないそうよ」
次の日。いつものように、食べきれないくらいの量の焼き菓子が並べられたテーブルを前に、グレヴィアがユリアナに告げた。

王宮庭園にある小宮殿の一室。いつものお茶会の場所に、レオハルトの姿はなかった。
「そうなんですか」
「陛下の体調がよくないそうよ」
「えっ？」
「このところずっと、寝たり起きたりの生活が続いているみたい」
淡々と語るグレヴィアに、ユリアナはかえって危機感を覚えてしまう。
「……そんなに、具合がよろしくないんですか？」
「あ、ううん。重篤っていうほどではないのだけど、陛下もなにぶんご高齢ですからね。レオハルトもさらに忙しくなると思うわ。それでも、お茶を飲むくらいの時間はとれると思うけど」
グレヴィアはそう言ったものの、それから暫くはふたりだけのお茶会が続くことになった。

それが数日続き、ユリアナは場所を変えてはどうかとグレヴィアに提案した。所有者のレオハルトがいない状態でこの小宮殿を使うことに、ためらいを覚えたからだ。しかし、レオハルトが僅かな時間を縫ってくるかもしれないからとグレヴィアが言ったこと

で、お茶会の会場は変わらないままだ。
そしてレオハルトが顔を見せなくなって十日目のお茶会。ユリアナはふわふわのシフォンケーキにフォークを刺しながら言った。
「……お兄様も、もし、ご兄弟がいらっしゃったら、こんなにお忙しくはならなかったのでしょうね」
「あら、そうかしら？　レオハルトは少し暴君なところがあるけれど、仕事はできるから、余計な人間がいないほうがやりやすいんじゃないかしら。兄弟がいたらいたで、争い事も増えるものよ」
争い事が増えるというのは王位継承の問題だろうか？　けれど、それ以上に気になったことがあり、ユリアナは優雅に紅茶を飲んでいるグレヴィアに視線を向ける。
「お兄様が暴君？」
「暴君は言い過ぎたわね。まぁ……言うなれば策士かしら。でも、このまま放っておくと、本物の暴君にもなりえるわね」
何故グレヴィアがそう言い切るのか、ユリアナにはわからなかった。
暴君というのは、自分勝手で暗愚な人物だ。公正かつ聡明なレオハルトが該当するとは到底思えない。しかし、グレヴィアはさらに彼女を驚かせるような言葉を続けた。

「でも、ユリアナが彼の傍にいてくれたら、そうはならないわ」
「わ、私では無理です」
「どうして？　ユリアナはレオハルトが嫌い？」
「いいえ、嫌いではありません」
「そう。よかったわ」
にっこりと知的な笑みを浮かべるグレヴィアに、ユリアナはさらに違和感を覚えた。
いったい、なにがよかったというのだろう？
結局その日も、レオハルトがお茶会の席に現れることはなかった――

レオハルトがお茶会に参加しない日々が、数週間ほど続いたある日。
エディアノン宮殿で月に一度行われている舞踏会に参加していたユリアナは、大広間でレオハルトの姿を見つけた。
白地の壁に黄金の装飾がなされた豪華な大広間で見る彼は、いつもよりも威厳に満ちていて近寄りがたい。普段は漆黒の礼装に身を包んでいるレオハルトだが、今夜は白い立ち襟のフロックコートを着ている。目を奪われるほど豪奢な刺繍が施されたそれを、彼は難なく着こなしていた。

もとより、ユリアナは公式な席ではレオハルトに近寄らないよう努めている。しかし、今夜はたとえ彼から呼ばれたとしても、畏れ多すぎて傍に行けそうになかった。
彼は誰とも踊らずにいたが、遅れてやってきたグレヴィアとだけは少し話をしてから彼女の手を取り、ワルツを踊り始めた。
グレヴィアが着ている水色のドレスは、抜けるように白い肌を持つ彼女によく似合っている。そして、プラチナブロンドの髪に飾られた青い薔薇の髪飾りは、宝石がちりばめられた華麗なものだ。しかし、彼女自身がそれに負けることなく美しく輝いていた。
キラキラと煌めくシャンデリアと、壁面の金の装飾の目映さの中でも、レオハルトとグレヴィアは特別に輝いて見えた。ワルツを踊るふたりを見ていたまわりの貴族から、感嘆の息が漏れる。
ユリアナは何故かいたたまれない気持ちになった。ミントグリーンのドレスの裾をひるがえし、舞踏会の行われている大広間からそっと抜け出す。
不思議と、胸の中がもやもやする。その理由がわからないから、余計に気持ちが悪い。
そうして応接間のソファでユリアナが休んでいると、紺色のフロックコートに身を包んだ青年が、声をかけてきた。
「失礼、少しお話をしてもよろしいですか？」

そう尋ねてくる金髪碧眼の青年には見覚えがなく、ユリアナは答えをためらう。すると彼はにこりと微笑んだ。

「私はグレヴィアの友人で、グラフォート侯爵家のジェラルと申します」

ジェラルは少しきつそうに見える顔立ちをしていた。しかし柔和な笑みを浮かべて告げられた言葉に、ユリアナの警戒心は緩む。

「まぁ、お姉様のご友人なんですね。私はレオーネ子爵家のユリアナです」

「ええ、知っています。あなたのことはグレヴィアからよく聞いていて、一度お話をしてみたいと思っていたのです」

「お姉様が私のことを？」

緩やかなウェーブのかかった前髪を揺らして、彼は頷く。

「ここは少し暑いですね。よろしければバルコニーで涼みませんか」

白い手袋をはめた手が目の前に差し出される。ユリアナはその手を取って立ち上がった。

ジェラルは彼女を連れてバルコニーまで行く。

「実は、こういった舞踏会などの席は苦手でしてね。人の多さや熱気にやられてしまう」

彼は顔を手で扇ぐ仕種をしながら、そんなことを言った。

「そうなんですか？　私もです」

「奇遇ですね」

にこりと微笑む彼の表情はとても綺麗で、先程までのもやもやした胸中を払拭してくれるようだった。少し怖そうに見えたのも、きっと彼が年上だからなのだろう。話をしているうちに、最初の印象は薄れていった。

給仕されたシャンパンを飲みながら、ジェラルと他愛ない話を語らう。こんなふうに男性と話をする経験は今までなかったため、ユリアナは新鮮に感じた。

レオハルトがユリアナを可愛がっていることは周知の事実なので、彼女がこういった会に参加しても、ダンスを申し込まれたり話しかけられたりすることがなかったのだ。

会話の間中、どこか艶めいた雰囲気のジェラルの青い目が、ユリアナを見つめていた。彼はレオハルトと同じくらいの年齢に見えるが、視線の向け方はレオハルトよりも蠱惑的に感じられる。

年上の男性というのは、皆このような感じなのだろうかと思いながら見上げていると、ジェラルはやけに真剣な表情をして、再び口を開いた。

「ところで、君に聞きたいことがあるのだけれど」

ジェラルのあらたまった様子に、ユリアナは首を傾げた。

「なんでしょうか？」
「君は、グレヴィアとレオハルト殿下をどう思う？」
「どう……というのは」
質問の意味がわからずに聞き返すと、ジェラルは顎に指を当てて、少し考えるような仕種をしてみせる。
「んー……直接的な聞き方をするなら、彼らは男女の関係にあるのだろうか。と、いうことなんだけど」
「お兄様とお姉様が、恋人かどうかという意味でしょうか？」
「まぁ、そうだね」
「……その、どうでしょうか。おふたりからそういったお話は聞いたことがないのですが」
「話を聞いたことがなくても、それらしい雰囲気を感じたことはない？　ふたりが抱き合ったり、キスしたり、そんな場面を見たことは？」
「……お兄様とお姉様がキス？」
唇はもちろん、頬にさえ口付けている場面に居合わせたことはない。
レオハルトが女性の手の甲にキスをしているのを見たことはあるが、その相手はグレヴィアではなくリズティーヌだった。

そう言えば、今夜の舞踏会にリズティーヌは来ているのだろうか？
グレヴィアが花嫁の最有力候補ではあるが、リズティーヌだって候補であることにかわりない。
家柄で言えば、王族の親戚に当たるグレヴィアのほうが格は上だ。しかしファルワナ公爵家は代々多産の家系であることから、リズティーヌをレオハルトの花嫁に推す声が強いのも事実。
リズティーヌのことを思い出し、気分が塞ぎつつも、ユリアナはジェラルの問いに答える。
「……どうでしょうか。私の前でなさったりはしません……おふたりとも大人なので」
ユリアナは、レオハルトが公衆の面前でそんなことをしたりしないだろうと考えて言ったのだが、ジェラルには違う意味にとられてしまったらしく、突然肩を掴まれた。
「それは、ふたりが大人の関係にあるという意味か？」
「お、大人の関係？」
それまで冷静に話をしていたジェラルが急に激昂しているように見えて、ユリアナは動揺した。
「――性交をしていると、君には思えるのか？」

「え」
「どうなんだ」
肩を揺さぶる彼に驚きつつ、ユリアナは思わずふたりが睦み合う場面を想像する。その途端、強く掴まれている肩が震えた。それに合わせて、彼女の髪に飾られた花や、レースのリボンも小刻みに揺れる。
ユリアナにも性の知識はある。最近、グレヴィアがやたらとそういう描写が詳細にされた恋愛小説を彼女に渡してくるためだった。
レオハルトの身体とグレヴィアの身体が繋がり合う様子を脳裏に浮かべると、胸がひどく痛んで、ユリアナの銀灰色に輝く瞳から涙が溢れる。
「わ、わからないです……私には」
自分はレオハルトとグレヴィアの結婚を望んでいるはずなのに、どうしてこうも胸が痛くなるのだろうか。
ユリアナの涙に気付いたジェラルは、屈んで彼女の顔をのぞき込んでくる。
「すまない、君はふたりと仲がよいから、なにか知っているのではないかと思ったんだ……驚かせてしまってすまなかった。悪気はないんだ」
「そこでなにをしている！」

ジェラルの謝罪の言葉が掻き消されてしまうくらいの怒鳴り声が響き、ユリアナの身体はびくりと跳ねた。
おそるおそる声のした方向を見ると、今まで見たことがないような厳しい表情で、レオハルトがジェラルを睨んでいた。
「……これは、レオハルト殿下」
ジェラルは恭しく頭を下げたが、レオハルトの表情は変わらない。
「名前は？」
「失礼しました。私はグラフォート侯爵家のジェラルと申します」
「ほう。伝統あるグラフォート家の者が、宮殿内で不埒な行為に及ぼうとは、甚だ失望させられる」
「いえ、私はただユリアナと話をしていただけで、そのようなことはなにも……」
「黙れ」
静かな怒りの炎を燃やすレオハルトに、ユリアナは身のすくむ思いだった。しかし、ジェラルは彼女とは異なり、小さく笑う。
「なにがおかしい？」
「いいえ、私は大変な誤解をしていたようで。ユリアナ……泣かせてしまって申し訳な

かった」

ジェラルは謝罪をしながら彼女の手を取り、甲に恭しく口付ける。

いったいなにが誤解なのか、ユリアナには少しもわからなかった。けれど、彼女の手の甲に彼が口付けたことで、ジェラルはいっそうレオハルトの怒りを買ってしまった様子だった。

「――触れるな、ジェラル。早々に退席せよ」

「わかりました。それでは、失礼させていただきます」

「この件、許されると思うな」

「罰を受ける必要があるならば、甘んじて受けさせていただきます。殿下」

レオハルトの横をすり抜け、ジェラルはさっそうと立ち去ってしまう。しかし、残されたユリアナはどうしていいかわからずに、ただうろたえるだけだった。

「あ、あの、お兄様」

カツカツと踵を鳴らし、レオハルトはユリアナの傍まで歩み寄ってくる。

彼がなにに対してこうも激昂しているのかはわからなかったが、ジェラルが言っていた罰という言葉が気になった。誤解でジェラルが罰せられてはいけない。ユリアナは、彼とはただ話をしていただけだとレオハルトに伝えようとする。

「お兄様、私はあの」

ふたりの距離はさらに詰められ、気が付けばユリアナはレオハルトの腕の中にいた。

彼女の細い腰に、彼の腕が回される。

「あの男になにをされた？」

「な、なにも」

「なにもなくて泣くはずがないだろう」

「い、いいえ、本当です」

顔を上げると、レオハルトのエメラルドグリーンの瞳と視線が絡み合った。

激情に駆られているせいなのだろうか？　今日はレオハルトの瞳が、先程のジェラルと同様に蠱惑的に見えた。

けれど、その眼差しにはジェラルよりもずっと熱っぽく、力があるように感じられる。

見つめ合ううちに、ユリアナの鼓動はますます速くなり、息苦しさすら覚える。

ユリアナは彼と視線を合わせ続けることが辛くなって俯くが、顎に手を添えられ上を向かされてしまった。

「では聞き方を変えようか。こんなところで忍び逢うようにして、いったいなにをしていた？」

「忍び逢う？」
抱き締められたまま、ユリアナはバルコニーの隅まで追い詰められる。
もしかしたらレオハルトは、自分に対しても怒りを抱いているのだろうか。ユリアナはその可能性に気付き、恐怖に震えた。
「お、お兄様、私はなにも……」
「黙って」
白い手袋をはめたレオハルトの手が、俯こうとする彼女の顎を再び持ち上げた。
そのまま彼の端整な顔が近付いてきたので、ユリアナは慌てて顔を背ける。
「……どうして私を拒む？」
「いやだからです」
グレヴィアに対して申し訳が立たない。
けれど、レオハルトにはその気持ちは伝わらなかったようだ。彼はエメラルドグリーンの瞳を意地悪く細める。
「いや……ね。いいよ、いやがっても。けれどそれが許されると思うな」
思いがけず強い力で、壁面に背中を押し付けられた。
「あの男から、奪ってやる」

「ち、違うの……、んっ」
彼の長い睫毛が視界に入った次の瞬間、ユリアナは唇に柔らかな感触を覚える。
レオハルトの唇が、ユリアナの唇に触れていた。
（どうして……私、お兄様とキスしているの……？）
レオハルトがなにか勘違いしているのは明白である。ユリアナはその誤解を解くため、彼の唇から逃れようとするが、力強く抱き締められているせいで逃れられない。
「や……ぁ」
レオハルトの唇は柔らかくて弾力があり、そして温かかった。
その温もりに、意識がどろどろに溶かされ、虜になってしまいそうになる。
「ん、やっ」
ぬめる舌先が、ユリアナの舌に触れてくる。
その感触がとても気持ちいい。それ以上を欲しがり始める自分の心を抑え付けるために、ユリアナは力一杯レオハルトの逞しい胸を押した。
「何故そんなにも拒む？　許さないと言っているよ」
「お兄様、お願いです。私の話を聞いてください」
ユリアナの懇願を聞き入れる気になったのか、レオハルトは彼女を拘束していた腕を

解く。
「では、場所を変えよう。こんなところでするような話ではない」
レオハルトが目配せをすると、近くに控えていた従者のクエストがふたりの傍にやってくる。
輝く栗色の髪と、大きな瞳の持ち主である彼は、ほっそりとしていて背が高い。外見は少年のようではあるが、馬の名手であり、レオハルトが重用している人物だ。
今夜の彼は黒い燕尾の執事服を身に纏い、レオハルトの傍についていた。
「退席する。私の部屋の準備を」
「かしこまりました」
レオハルトの命令に恭しく頭を下げると、クエストはふたりを先導するため歩き始める。
先を歩くふたりにならってユリアナも歩き出したが、その足取りは決して軽いものではなかった。
（私は……お兄様を怒らせてしまったのかしら）
過去にあった出来事が思い出せないままなのに、今度は彼を怒らせてしまったのだろうか。そう考えると身がすくみそうになる。

バルコニーでは話せないと言うくらいだから、ひどく叱られるのかもしれない。それを想像すると、レオハルトの部屋に足を踏み入れることが怖かった。
やがて彼の部屋の前に着くと、大きな白い扉が開けられた。室内へ入っていくレオハルトに、ユリアナも続く。
彼の部屋は淡いブルーの壁に、白や金の装飾が施されている。同じく白と金の色合いのソファに、レオハルトは腰を下ろした。
「座りなさい、ユリアナ」
彼はそう言って、ユリアナに隣に座るよう促す。今更拒みようもなかったため、ユリアナはおそるおそるそこに腰を下ろした。
「……お、お兄様、私は……ジェラル様とはなんの関係もないんです」
「なんの関係もない人間と、バルコニーでなにをしていたんだ？」
問いかけとともに、厳しい視線が向けられる。彼がユリアナの言うことを信じていないのは明白だった。
「本当に、ただ、話をしていただけなんです」
「どんなことを話していた」
長い足を組みながら、レオハルトが追及してくる。

「色々……です」
「私に言えないようなことか」
そんなつもりで言ったわけではないのに、レオハルトはユリアナの答えに不機嫌そうに唇を引き結んだ。こんな彼を今まで見たことがなかったから、不安を覚える。
やはりレオハルトを怒らせてしまったのだろうか。彼女の銀灰色の瞳に涙が滲んだ。ミントグリーンのタフタに花の刺繍が施されたドレスを、ユリアナはぎゅっと握り締めた。
「……ユリアナ」
ふいに、レオハルトに肩を抱かれて引き寄せられる。
彼の身体を間近に感じると、堪らなくなって涙が溢れ出した。
「お兄様」
彼を失いたくない。そんなふうに思えば思うほど、ユリアナはレオハルトとの距離を感じてしまう。傍にいたいと言いたいけれど、言ってしまえば彼は離れていくかもしれない。そう考えて、ユリアナは唇を強く噛み締めた。
「……唇に傷がつく」
レオハルトの指がユリアナの唇に触れる。

「駄目だよ、おまえが見ていいのは私だけだ。おまえに触れていいのも……」
彼に触れられている部分が熱い。自分の体温も、レオハルトの体温も、そう変わらないはずなのに。
「私は、本当に……ジェラル様とはなにもないんです。だって、今日初めて会ったばかりで」
「信じることはできない」
きっぱりと言い切られて、自分はそんなに信用されていなかったのかと、ユリアナは悲しみのあまり肩を震わせ、膝のあたりに涙を零した。
「おまえが私を信用していないのはわかるが、だからといって離れていくことは許さない」
信用していないのは彼のほうではないのか？
訳がわからない。ユリアナがレオハルトを信用していないなんてことはないのに、いったい何故そう思うのか。
ユリアナが戸惑いや悲しみといった感情の渦に呑み込まれていると、レオハルトがふいに彼女のコンペールのボタンを外し始める。
そんなことをされたらドレスが脱げてしまう。彼の動きに気付いたユリアナは慌てて

ドレスの前を押さえた。
「お、お兄様……なにを」
「ユリアナ、今夜はずっと私の傍にいなさい」
彼女の問いには答えず、レオハルトが思いがけないことを命じてくる。
この部屋に泊まっていけと言っているのだろうか？　寝衣に着替えるため、彼自らドレスを脱がそうとしているのだろうか？　そんな戸惑いのなか室内を見渡すと、先程までいたはずのクエストが、いつの間にかいなくなっていた。
ユリアナの様子を見ていたレオハルトは薄く笑う。
「誰かに助けを求めようとしても無駄だよ」
「……助けを求めてはいないです」
「諦めたという意味か？　聞き分けがいいな」
再びレオハルトの指が、ユリアナの唇に触れる。
「賢い選択だ」
こうやって唇に触れられていると、バルコニーで口付けられたことをつい思い出してしまう。あの甘美な感触と微かな快楽。先程同様、口付けの先を求めたくて堪らなくなるような感覚に陥り、ユリアナはどうしていいのかわからなくなった。

立ち読みサンプルはここまで

「ユリアナ、あの男のことは忘れろ」
「ジェラル様は、お姉様のご友人で……」
「なに？　グレヴィアがおまえにあの男を紹介したのか？」
不快そうに眉をつり上げた彼に、ユリアナは慌てて左右に首を振る。
「違うんです。そうではなくて、偶然、話しかけられて、少しお喋りをしていただけなのです」
「本当になにもないのか」
「はい」
頷く彼女に、レオハルトは安心したように微笑む。
「そうか。では、ドレスを着替えて奥に来なさい」
それだけ告げると、レオハルトはユリアナの身体を離して立ち上がり、奥の部屋へと行ってしまう。そして彼と入れ替わるように、白い扉の向こうからメイドが数人、ユリアナの傍へと歩み寄ってきた。そのうちの一人は、真っ白い寝衣を手にしている。
ユリアナは彼女たちにドレスを脱がせてもらい、肌触りのよい寝衣に着替えた。
レオハルトが入っていった奥の部屋はきっと寝室だろう。ユリアナはエディアノン宮殿に泊まったことはなかったが、王家所有の別荘には何度か泊まりに行ったことがある。